

## テレビドラマの居間と家族

### Study on Living Rooms Seen in TV Dramas in Japan

元岡展久 (お茶の水女子大学生生活科学部)

山口恵子 (トヨタテクニカルディベロップメント株式会社)

Nobuhisa, MOTOOKA

Keiko, YAMAGUCHI

#### 研究の背景と目的

本研究は、1970年代と1990年代のテレビドラマに映し出された居間を対象とし、当時の人々が居間について持つイメージの相違について、比較検討をおこなったものである。

ここで、まず簡単に戦後住宅の変容を述べる。戦後日本の住宅の間取りは、1950年代より公営住宅に導入されたダイニングキッチン「DK」<sup>1</sup>を母体に、それを発展させた「nLDK」形式を基準として展開されてきた。こうした住宅に見られる間取りの変容は、同時に、家族形態の変化を映したものである。ダイニングキッチンやステンレス流し台、3種の神器といった高度成長期の住居の変容を形容する言葉は、旧来の「家」制度をもとにした地方の家族とは異なる、いわゆる核家族「ニューファミリー」の都市における生活を反映したものであった。高度成長期、地方から大都市に集中する労働者が、都市で結婚し核家族家庭を築く。この大量の核家族を受け入れたのが団地であった。そして、高度成長期以降、70年代から80年代にかけて、平均的な住居面積の拡大と、子供の個室の一般化にともない、「nLDK」が核家族の住居の基準となったのである。

一方、90年代以降は、2世帯住宅やコレクティブハウスなど、核家族のための画一的な「nLDK」住宅とは異なる住まいが数多く提案、建設される状況となってきた。

こうした背景から、本論では高度成長期の余韻の中、核家族化の進んだ70年代と、バブル経済を経て家庭崩壊が叫ばれた90年代、この両時期にテレビに映し出された居間のイメージを比較し、人々が思い描いていた居間の姿の違い、ならびに生活様式像の違いを明らかにする。

#### 対 象

分析の対象は、1970年代、および、1990年代に制作・放映されたドラマとする。対象の選出に当たっては、スポンサーの影響のないNHKの番組に限定した。20年間に制作、放映されたドラマの中から、家族を描

#### 基本情報

放送時期

家族構成

所在地

#### 居間、ダイニングに関する事項

間取りの形式 (平面図の作成)

座様式

席順

#### インテリアに関する項目

内装材 (材質、色)

照明

設置備品

表1 調査項目

いたもの、住居内の居間の様子が写されたものなど、本研究の分析が可能な作品を、両時期それぞれ5作品ずつ選び出した。これらのドラマを横浜市の放送ライブラリ<sup>2</sup>で視聴しながら、＜表1＞にあげた点について調査シートを作成した。またドラマの映像から、居間の推定平面図を描き起こした。

ここで簡単にテレビドラマについて述べておこう。テレビドラマが放送され始めたのは50年代後半である。西野智成<sup>3</sup>によれば、当時のドラマは、都市の平均的中産階級の生活をテーマとし、身近な生活を描く内容だったという。その後、60年代から70年代にかけて放送されたいわゆるホームドラマは高度成長期の家族のイメージを映し出した。本論の比較分析対象の一つとなる時期である。一方、1980年代後半からはバブル経済の影響を受け、ファッショナブルなトレンドドラマが流行する。しかし、ここには家族をテーマにしたものは多くない。その後、1990年代には、80年代の反動として、家族の絆、家族のあり方を問うドラマが復活する。本論の家族と居間の分析において、もう一方の分析対象として、この90年代の家族をテーマとしたドラマを取り上げた。

## 分 析

調査の結果を＜表2＞に示す。各ドラマの放送時期、居間とダイニングの間取りのタイプ、家族構成ならびに平面図を示した。

70年代のドラマのほとんどが、核家族を描くものであったことが分かる。ドラマの内容は、当時の典型的な核家族の生活の様子であり、また間取りも画一的なものであった。一方90年代は、多様な家族像が語られていた。核家族だけでなく、二世帯、三

世代同居などの例もみられる。その際、映し出される居間の様子にも、モダンなものから伝統的な畳部屋まで、多様性をみることができた。

概観すると、近代以降日本の住環境が辿ってきた方向性、つまり住生活の洋風化(モダンリビングやnLDK化、床座から椅子座へ)という傾向は、ドラマでの居間の変化と必ずしも一致していたとはいえない。住宅全般に見られる生活様式の洋風化という流れよりも、むしろ、生活様式に対する意識の多様化という流れがより強く現れた結果だといえよう。こうしたドラマで描かれた家族の状況は、必ずしも多数の家族に見られる現実と一致していたわけではないだろう。むしろ現実像よりも、当時の社会の関心に対応した家族や居間の姿が描かれていたと読みとるべきだ。1960年代には、すでに夫婦+子供二人の四人世帯の画一的家族像が定着し社会システム上も「核家族」が基本単位とされるようになったとされ<sup>4</sup>、それが70年代にそのまま典型例としてドラマ上にも展開された。つまり、映し出される居間像が、一般的な典型例に収斂される70年代である。一方、畳に床座という和風の住様式も一部で描かれている90年代は、多様な家族の個別例としての住様式が示されていた。

上記の点は、家族構成や間取りのみに見られる特徴ではない。内装や照明、備品類についてみても、同様の特徴を指摘できる。すなわち類似したインテリアの70年代と、より多様化した90年代の様子が露見されるのである。

居間の使われ方についても、両時期において興味深い相違がみえる。たとえば、70年代のドラマでは、居間とダイニングが分かれている場合、団欒はほぼダイニングで

1970年代					
タイトル	連続テレビ小説 水色の時	わが美わしの友	銀河テレビ小説 となりの芝生	土曜ドラマ 死にたがる子	銀河テレビ小説 太郎の青春
放送 時期	1975年4月7日	1975年11月15日	1976年1月5日	1979年2月17日	1980年1月7日
居 間 平 面 図					
間取 り	隣接型	隣接型	一体型	一体型	隣接型
家族 構成	夫婦 45+41 長女 17 長男 15 次男 14	夫婦 50代+40代 長男 17	夫婦 30代+30代 長女 11 長男 8	夫婦 40代+30代 長男 11	夫婦 50代+40代 長男 18

1990年代					
タイトル	土曜ドラマ 家族の値段	土曜ドラマ 理想の男性	連続テレビ小説 京ふたり	連続テレビ小説 ぴあの	土曜ドラマ 妻よ
放送 時期	1990年1月20日	1990年2月24日	1990年10月1日	1994年4月4日	1994年12月10日
居 間 平 面 図					
間取 り	兼用型	分離型	兼用型	隣接型	分離型
家族 構成	夫婦 50代+50代 母 70代 長女 20+娘婿 20	夫婦 50代+50代 長女 20代 長男 22	男性 40代 父 60代+母 60代 長女 20代 長男 10	男性 60代 長女 30代 次女 30代 三女 20代 四女 20代	夫婦 50代+50代 長女 20代

表2 居間の平面図と家族構成表

平面図スケール 0 1 2 3M

居間平面図について、居間の描写がないドラマの場合は、ダイニングのプランを示す。

間取りタイプ凡例 (居間とダイニングの関係を示す)

隣接型: 居間とダイニングが隣り合ったもの

兼用型: 一つの部屋を居間とダイニングに兼用しているもの

一体型: 居間とダイニングの領域は異なるが空間として一体になったもの

分離型: 居間とダイニングが廊下や別の部屋によって完全分けられているもの

行われていた。「めし食いドラマ」といわれたように、70年代のドラマは食事の情景を多く描いたが、そこでは食事と団欒を一体としてとらえ、ダイニングをコミュニケーションの場として描写している。90年代では、ダイニングでの食事時以外に居間に家族が集まる場面もあり、居間とダイニングを区別していたことが伺える。しかし、居間に集まる家族は、団欒するというより、一人一人がバラバラなことをしている場面が多い。90年代の家族の変化を建築計画学者の服部岑生は、平等意識をもった家族はコミュニケーションを必要としない傾向があると指摘した<sup>5</sup>。その個人の孤独を反映するかのよう、90年代のドラマでは、居間はあたかも個室の延長のようであり、居間においても家族の団欒と呼べるものは写されていない。

## まとめ

本研究によって、テレビドラマにみられる70年代の居間像は、単一で、差異の少ないものであったのに対し、90年代は、様々な家族の状況に応じて多様なものであったことがわかった。この差は、居間やダイニングのインテリアについても同様に見られた。また、70年代では、ダイニングで団欒が主に行われていたのに対し、90年代では、家族コミュニケーションとしての団欒の場面がほとんど描かれていなかったことが指摘できる。

対象作品数が少ないうえ、居間の状況が作品の設定によるところが大きいなど、具体的な傾向を特定するには、資料が不十分であった。しかしこの分析は、人々の思い描く居間像を知るために十分有効であったといえる。今後、対象作品を増やすとともに、映画等に描かれた家族像についても対

象を広げ、また戦前や高度成長期との比較についても調査を進めることで、より具体的な住宅の居間空間の相違点、社会状況との関連を明らかにしていきたいと考えている。

本稿は、山口恵子による、椋山女学園大学生生活科学部生活環境学科元岡展久研究室での卒業論文『テレビドラマの居間と家族—家族のあり方と居間形態の関係について—』（2002年）をもとに、その後の知見を含め加筆修正したものである。

- <sup>1</sup> ダイニング・キッチン（DK）は台所と食堂が併存している部屋である。限られた面積を有効利用すると同時に食寝分離の考えに適合していたため、1951年の公営住宅（51C型の平面）以降、公営住宅を中心にこの形式が大きく広がった。その後、公営住宅の面積の拡大に伴い、リビングルームの独立、各個室の確保によってnLDK（nは個室の数を示す）型の平面として普及する。基本的な考えとしては、公室と私室を分離する公私室型の平面であり、この形式は家族の平等な関わりや、家庭生活の近代化等と相まって、戦後住宅の平面に急速に広がった。公営住宅の51C型の平面においてDKが考え出された過程は、藤森照信『昭和住宅物語』新建築社1990pp. 276-292に詳述されている。
- <sup>2</sup> 放送ライブラリとは、財団法人放送番組センター運営による施設であり、横浜市にある。放送番組の収集、保存、一般への公開、放送番組に関する情報収集、保管を行っている。放送された全ての番組が収集されている訳ではなく、受賞番組、話題になった番組、時代を反映していると判断された番組が選択され収集されている。こうした番組の収集基準は、本研究の対象としても合致するものであり、放送ライブラリの資料を調査対象とした。
- <sup>3</sup> 西野智成『ホームドラマよどこへ行く ブラウン管に映し出された家族の変遷とその背景』学文社、1998。
- <sup>4</sup> 沢田知子『住宅調査に見る多様な現代家族』、1999年度日本建築学会建築計画部門パネルディスカッション資料、1999。
- <sup>5</sup> 服部岑生『家族・個人・社会と住まい—ヒューマンコンタクトのあり方と住宅計画』1999年度日本建築学会建築計画部門パネルディスカッション資料、1999。

## その他参考資料

- ・鈴木成文「家族の変化は住居を変えるだろうか」『建築雑誌』1995年4月号 pp. 50-51。
- ・若尾典子、久武綾子、戒能民江、吉田あけみ『年表と図表で読む戦後家族 1945-96』家族データブック、有斐閣、1997。
- ・日本民間放送連盟『日本民間放送年鑑』コーケン出版、91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99。